

---

# 仮面ライダーウィンド

hori

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダー・ウインド

### 【Zコード】

Z0929V

### 【作者名】

horii

### 【あらすじ】

仮面ライダー・ウインドそれは風の力を持つ仮面ライダ・・・そして仮面ライダー・ウインドへと変身する少年の日常は彼が偶然、手に入れたウインドの变身ベルト「リングドライバー」と謎の怪人達によって少しづつ壊れていってしまう・・・ウインドはこの世界をそして仲間や大切な人達をを守れるのか。

少年は風の力を手に悪を打ち碎く！！！！

邪悪を蹴散らせ風の力！！

## プロローグ

仮面ライダーウィンドそれは風の力を持つ仮面ライダー・・・そして仮面ライダーウィンドへと変身する少年の日常は彼が偶然、手に入れたウインドの変身ベルト「リングドライバー」と謎の怪人達によって少しづつ壊れていってしまう・・・ウインドはこの世界を、そして仲間や大切な人をを守れるのか・・・。

少年は風の力を手に悪を打ち碎く！――！――！  
邪悪を蹴散らせ風の力！――！――！

ある隕石の中に一つのベルトがあつた・・・。  
するとベルトは一瞬だけ強く輝きだした・・・そして少したつたあと輝きは消えた

そして隕石は人が存在する地球へ向かつた。  
もうすぐ戦士が誕生する・・そうウインドが・・・。

## プロローグ（後書き）

どうもはじめまして・・小説は書くの初めてなので緊張します。  
文はダメダメですが少しでも読んで頂けると幸いです。

## 第1話（前書き）

第1話やつとスタート！！

主人公「ついに始まるんだな」

そうだな、でもそんなに長く書かないから、それじゃスタート。

## 第1話

### 第1話

もつあと数日で夏休みといつ中学校。

「ふあ～寝み～。」

とあぐびをしてこるのは「加藤木歩」。

至つて普通の中学校に通つてゐる男子中学生である。

「もう・・しつかりしなさいよ・・歩。」  
そして歩を軽く注意しているのは「火咲逢」。  
彼女は歩の幼馴染でしかも美少女である。

「う～ん? なんだよ逢?」

「もうそろそろお皿だよ。今田どうで食べる?」

「う～ん・・今日は気分転換に食堂じゃなくて屋上にしようかな。」

「分かった。じゃあ・屋上に行きましょ。」

「ああ。」

二人は屋上へ向かつた。

屋上

屋上についたふたりは近くにあるベンチでお酒をとっていた。

「やつぱ、火咲の弁当がつまこな。」

「ふふ・・ありがと。」

歩は実は毎日・・逢に弁当をつべつてもらっている。周りの男子が聞いたら歩は速攻で隠されただらう。

「オマエはいい奥さんになるな。」

「ふえ！？／＼」

逢は顔を赤らめる。

「どうしたんだ？」

「恥ずかしいこと言わないでよ。もう・・／＼」

歩は逢を不思議に思いつつ空を見上げた、すると何か光った物体が落ちてくるのが見えた。

「逢・・あそこになんか見えないか？」

「あ・・ほんとだ、なんか落下してるよ。」

そして・・ズゴン・・・・とこつ音を起しどうし物体は落下した。

「おこ、落ちたぞ隕石みたいなやつ」

「すゞい揺れたわね . . 。」

二人は少し沈黙した後

「まあ . 明日になつたらなんか知らせがくるだろ。」

「そうね。」

と言つた。

この歩たちが見た隕石がこの後 . ウィンドの誕生に大きく関わる事になる . . 。

第1話（後書き）

歩「あつたべ、」のあとびひなみんだか。。。

ダメな文ですが・・・よかつたらまた見てください。

逢「あたし・・どうなるんだろ・・。」

## 第2話（前書き）

第2話です。

歩「やつとだな」

今回で変身までもつてかないと . . . 。

歩「では第2話スタートです。」

歩 . . それ俺のセリフ . . . . 。

## 第2話

### 第2話

お昼を食べ終わった一人は教室へ戻つて来た。

「？？？」おーい・歩。お前どこに行つてたんだ？食堂にもいなかつたし。」

と声をかけられた方を向くと三木 来牙がいた。

「ああ・・・今日はちょっと氣分転換に屋上で食べてたんだ・・。今・歩と話しているのは三木 来牙で逢と同じ幼馴染で昔からの知り合いである。

「て事は、火咲も一緒だつたんだら・・・。」

「ああ・・・。」

「氣をつけるよお前。下手したら男子達に殺されるぞ。」

「まあ・・・そんときはなんとかあるよ。」

歩は来牙と別れて自分の席に戻る。

「 もうすぐ授業始まるな。」

授業の始まりのチャイムが鳴った。

放課後

学校の授業が終わり歩は帰る準備をおわらせた所で  
。。。

「歩。」

逢が話かけてきた。

「なんだ？」

「 今あと用事ある? 」

「いや特になことナビ。」

「じゃあ……ちょっと買い物に付まか合つてくれない?」

「おう。別にいいや。」

歩は後ろに殺氣を感じた。

「でも……ちょっと先に行つてくれ。」

「え? なんで?」

「男子達の攻撃が襲つてくるから……。」

と言つて歩は走り出した! -!

「あー、ちょっとあみ……。」

男子達「「「まああてええええええ加藤木いいいいいいいいいい」」」

男子たちはもの凄い勢いで歩を追いかけて行つた。

「行つちやつた。」

逢は少し考え……。

「歩に言われたとつり先に行つてよ。」

その頃……歩は

男子達「加藤木！！貴様ああ！！自分で幸せになりおつてええ  
えええ！！」

歩「はあ・・・はあ・・・俺が幸せって・・・意味がわからぬ よ  
おおお！！」

男子達の追手から逃げていた

歩は女子との関係とかには鈍感な奴らしい・・・。

この町には色々な店が集まつた巨大なショッピングセンターがある  
ほとんどの人達が買い物しにくるため今日もここは人が大量にいた・  
・。

そして歩や逢もここに来ていた。

「で・・今日・・はここだ・・・何を・・・買うんだ？」ボロッ

結局・・男子たちから逃げられなかつた歩はリンチされボロボロだ  
つた・・。

「今日は料理に使う食材の買い物・・・といつか大丈夫？」

「ああ・・・体はなんとか・・・てか普通に買い物なら俺・必要な  
いんじや？」

「歩・・忘れてるの今日はアンタの家、瑞希さんいなーんじょ。」

「え? あー そうだった今日は瑞希姉さんに逢の家に世話をなつてね  
つて言われてた。」

「で・・荷物は多いから手伝い係として。」

「そういう事が・・・。」

「うん。そういう事ー。」

「うんじゃ行くか。」

「うん。」

二人はショッピングセンターへ入つて行つた。

買い物が終わり二人はショッピングセンターから出てきた。

「はあー おわつた

「うん。」

二人が話して帰ろうとした時

キヤアアア

悲鳴が聞こえた

「な、何！？悲鳴？」

「なんだ？」

ドガーンッ！――と中から爆発音が聞こえてくる

「逢・・荷物頼む！！」

歩は走りだす。

「あ・・歩　　！！」

ショッピングセンター

中に入ると彼の目の前には悲惨な光景が広がっていた。

証明が消え入口に近くには警備員がホールには定員や客が皆殺されていた。

皆斬られた跡や噛みつかれた跡があつた・・・。

「なんだよこれ？・・・なんなんだよ――――！」

と叫んだ歩の目の前に何かが現れた。

「グガア アアアアーーー！」

皆を殺したと思われる怪人が現れてた。

「くそーーー！」

すぐに走って逃げるが怪人はすぐに追いついた。

そして歩にみぞ打ちを入れる

「がはあーーー？」

みぞ打ちを入れられた歩はそのまま壁に吹き飛ばされる。

「はあーーーはあーーー（）のままじや殺される。何か対抗できる物を（）」

歩はあたりを見回す・・・すると物置のよつな所を発見した。

「（あそこなら何があるかもしれない・・・ついでに隠れられるし。）」

そのまま歩は物置へ飛び込んだ。

「グルガアアアアーーー！」

怪人は叫び標的をさがす。

「なにかないのか？ーーーこれは？」

歩は物置で対抗出来る物を探す・・・。

そこで歩はベルトとケースを見つけた・・・。

そして見つけた途端・・・怪人の攻撃が歩を襲った！――

「うわっ！――」

吹き飛ばされるがなんとかもちこたえた歩はベルトを巻くすると・・・

リングがケースから飛び出しベルトに装填された。

すると歩の心に声が流れてくれる

歩の心の中

「なんだこい？」

そこには何もない真っ白な空間だった。

「？？？」「いはは・・・お前の心の中よ。」

歩は声の聞こえた方をむかへたのはロープを被つた歩と歳が同じく

らいの少女が立っていた . . . . 。

歩「お前 . . . だれだ?」

??.??.「話はあとよ。とにかくそのベルトで変身しなさい。」

歩「俺が変身?」

??.??.「そりゃ。じゃないと大切な人守れないわよ。」

歩「・・・・・・・・」

歩には逢の顔が浮かぶ自分の大切な人が . . . 。

歩「わかった。変身してあの怪人をぶつ飛ばす! ! !」

??.??.「それでこそアユムよ。」

歩「お前なんで俺の名前を?」

??.??.「フフ . . . 。」

少女は小さく笑った

そして元の場所にもどる。

目の前にはもう怪人が来ていた。

「行くぜ怪人！！」

と言い放ち歩は叫んだ

「変身！..」

そして歩が装填したリングを回すとベルトが叫ぶ！！

「リング・イン・ライダー ウィンドー！！！」

ベルトから吹きだした風が歩の周りに集まりその風が消えると歩の姿は「仮面ライダー」へと変わった。

この瞬間・・・ウインドは誕生した。

## 第2話（後書き）

はー終わった . . . 。

歩「次回は戦闘だな。」

うん . . . そだな . . . . 。

歩「なんでそんなに暗いんだ。」

戦闘は書くのが苦手なんだよ . . . 。

歩「あーまあがんばれ」

うん。という事で第3話 . . .

ダメな文ですがよかつたら見てください。

### 追記

感想と悪い点を書いてくれた方こいじでゆ礼を言わせて頂きます。

ありがとうございます!!

これからも頑張るのでよかつたら読んでください。

### 第3話（前書き）

第3話です

今回は怪人と初戦闘です。少し短いかも。  
ではスタート。

そしてウインドが誕生した。

「さあ・・・行くぞ！-！」

「グルガアアアア-！」

怪人は叫びウインドへ襲いかかる。

「ガア-！」

手の爪が伸びる。そしてウインドへ斬りかかる。

「あぶねつ-！」

なんとか避けるウインド

「グガア。」

「今度は」ひちの番だ。」

ウインドは怪人へパンチを放つ。

「タア！！」

「グガツ！！」

パンチを喰らつた怪人が吹つ飛ぶ。

「これ凄いな。」

歩は自分の手にした力に驚いている

「体も軽いし力も上がった。変身する前に喰らつた傷は痛いが・・・  
これならいける！！」

ウインドは走りそのまま怪人へとび蹴りを放つ。

「うおー！」

だがウインドのとび蹴りは当たる瞬間怪人は消えた。

「何ー？」

そして背後から消えた怪人の攻撃が放たれる。

ドガツー！

「ぐあー！」

背後から攻撃を受けたウインドはすぐに態勢を整えようとするが。

ドガツ！…バギ！…ドガツ！…

「ぐああああああああああ…！」

怪人の高速でくる攻撃を喰らい吹き飛ばされホールの床に転がる。

「ぐわ！…なんだあの早さは…？」

「グガアアアアアア…！」

さうに怪人の高速移動が早くなる。

「また早くなつた！…なんなんだアイツ…。」

立ちあがつたウイングに怪人が攻撃を仕掛けようとする。

するとウイングのベルトについているケースからリングが飛び出しつきた。

「なんだ！？」

そして変身する前に話した少女が声をかけてくる。

「アコムのリングを使つのよ。」

歩「このコングは?

「このリングはアコムが今戦つてこむ魔人と同じように高速移動できるコングよ。」

歩「そうなのか。助かった。」

「あと他にもリングがあるから活用しなさい。」

歩「わかった

歩「勝ちなさこよアコム。」

「あとでじつかり話しますよ。」

歩「あーーーーーだからお前なんで俺の名前を?」

歩「あ・・・おいーー！」

そして少女の声が消えすぐに怪人の攻撃がくる。

だがそれより先にウインンドがリングを装填し回す。

「リング・イン・ソニック！ー！」

ベルトが叫ぶとウインドの動きが早くなり怪人の攻撃を避ける。

「今までやられた分返させてもらひだ。」

ドガッ！ーーー！

ウインドの拳が怪人を殴り飛ばした。

「グガアア。」

怪人はうめき声をあげる。

「まだだ！！」

さらにウインドは攻撃を怪人にいれる。

ドガツ！…バキ！…ドガツ！…

ウインドはパンチを連續を入れたあと

「てえやあああ！！」

そのまま怪人に回し蹴りをいれる。

「グガアアアアア」

怪人はそのまま吹き飛ばされる。

「ああ…終わりにしてやる。」

ウインドはケースから金のリングを取り出した。

そのリングをベルトに装填し回す。

「リング・イン・ファイナルブレイク！－！」  
とベルトが叫ぶとウインドの周りに風が集まり

「はあっ！－！」

ウインドがジャンプしキックの態勢になる。

するとウインドの周りにあつた風がキックする方の足に集まつた。

「ウインドストライク！－！」

そう叫びウインドは怪人へキックを放つた。

「はああああああああああ！－！－！」

ウインドの叫びとともに風が勢いを増しキックが怪人へ直撃する。

「グガアアアアア－！－！」

ウイングストライクを受けた怪人は爆発した。

「はあ・・・はあ・・・倒した。」

歩は変身を解き元の姿へもどる。

「なんとかなつたな。」

？？？「アユム。」

歩「え？ なつ！？」

声をかけられた方へ向くとそこにはあの心の中で出会った少女が目の前に立っていた・・・。

### 第3話（後書き）

なんとか戦いを終わらす事が出来ました。  
えー次回は謎の少女の正体が分かります。

あと2話までやっていた座談会的なモノは面倒なので章が終わつた  
時にだけやります。

#### 追記

感想と悪い点をかいてくれた方ありがとうございます。  
今後もこんな感じで進みますがどうぞみてください。

## 第4話（前書き）

投稿が遅れて本当にすみません。

第4話でこの章は終了です。

だらだらしててなおかつ、ダメな文ですがよかつたらみたください。

それでは第4話スタート。

怪物との戦いに勝利した歩。

ベルトを外し変身を歩は後ろから名前を呼ばれる。

自分の名前を呼ばれ、見た先には心中で出会った少女が立つてい  
た。

「お前・・・一体何者なんだ？」

と歩が問うと少女は頭のロープをとつて素顔を見せた。

「私は歩が持っているベルトに造られた力の塊よ。」

そう話した少女の姿はもの凄く綺麗だった。それを見た歩は一瞬思  
考が停止してしまった。

「・・・歩?」

少女が不思議そうな顔で見てくる。歩は思考が戻りあわてて返事をかえす。

「あ、ああ・・・そなのか。どうして力の塊が実態化したんだ?」

「それはウインドの力が増幅したからよ。」

「力が?」

歩が聞くと少女はウインドの力について説明を始めた。

「そり。ウインドの力は歩の心力(心の力)によつて力が上がるの。」

」

「てことはお前は俺の心力が上がつてウインドの力が上がつたから実態化したのか。」

「そういう事よ」

「じゃあもし俺の心力が無くなつたらどうなるんだ？」

「歩の心力がなくなるとこつ事は歩が死ぬつて事になるのよ。」

「心力はウイングの力の源みたいな物なのか。」

「みたいじゃなくて源よ。そして歩がもし死んでしまつたら私もそのベルトも消えるわ。」

「俺が死んだらお前も消えるのか・・・。」

「そうこういとね。」

「じゃあ、お前は俺が守るな。」

「ええ。ありがと歩。」（何かしらこの胸をつつかれるよな感じは？）

「お前そつこえば名前無いのか？」

「ええ。名前は無いわでもじいて言つなら風の化身ヴァコつてと

「かしづ。」

「ちづか……じゃあ俺はコアって呼ぶな。」

「コア……なんで？」

「それは、ヴァ コよりもコアの方が名前の一部で呼びやすいし可愛いと思つたからかな。」

「えー？」 ドキッ！

コアの頬が少し赤くなる。

「……コア？」

歩は不思議に尋ねてくる

「え、ええ。わかつたわ歩。」（ちづからなんのかしら）の感情は？）

コアは自分に初めて芽生えた感情に戸惑っていた。

「あと聞きたいんだが。」

「…………」

ユアは自分の感情についての疑問が解けず考えこんでいるようだ。

「おーい……ユア？」

「あ、歩……な、なにかしら？」

「ここにいた人たちを襲つた怪物は何なんだ。」

「あいつらは次元怪人。名前のとうりに次元によつて作られた怪人よ。」

「次元つてなんで次元から怪人が出てくるんだ？」

「それは人間の負のエネルギーが次元に取り込まれて形となつて人を襲うのよ。」

「負のエネルギーで怪人ができるってそんなんで怪人が出来たら世界が怪人だらけだぞ。」

「そうね。このままだとマズイわね。」

「あとで。」

「？」

「次元怪人ってのは呼びにくいんだが。」

「それもそうね。もう一つのアイツらの名前は『ディメンション』よ

「ディメンションか……。」

「あと最後に質問なんだけど……。」

「ええ。」

「俺の名前を知っている理由を教えてくれ。」

「・・・・・」

ユアは少し黙り・・・。

「ソレにすっとこのもアズイし場所を遠ざかるわよ。」

といい、歩の手を掴んだ。

「ああ

と歩が返事をすると二人は風に包まれその場から消えた・・・

ビルの屋上

「風に包まれた歩とコアさび」かのペルの屋上にいた。

そしてコアが話を始める。

「あれじや話しまじょうつか。あたしが歩を知つてこの理由を

「ああ。」

「じゅあまづ初めに歩せあたしの事を覚えてなーの?」

「ああ。まつたぐ。」

「じゅあ・・・2年前の事件は?」

「……お前なごでんの」とを知つてゐただ。」

「私はあの場所で歩と出会つたの。」

「えりやつて。」

歩は歩ぶがもうコアの姿は無かった。

「おこ。話はまだーーーーー。」

「ここにコアは風を起して消えた。

「そう。じやあ話は終了ね。それじゃ。」

「俺があの時、ベルトに選ばれた?」

「それは、あの時、歩がベルトに選ばれたからよ。」

「なんで・・・?」

「ええ。でもあの時ベルトは力が増幅したの。」

「でもお前は力が増幅しないと姿が出来ないんじゃ。」

「歩に瓦礫が降つてくる時に歩を助けたのは私よ。」

「ニア。」

歩は夕焼けの空を見上げて名前を呼ぶ・・・があることに気がついた。

「あ、ヤバ！――逢の奴置き去りにしちました。早く行かないとい。」

と言つて急いで逢の所へ向かう歩だった。

第一章その他のウイング END

## 第4話（後書き）

なんとか書き終わりました。次回はキャラの紹介です。  
次回は物語ではないので早めに投稿出来るかと思います。  
ここからは座談会的な物であまり好きでない人は飛ばしてください。

歩「ホントに初めていいのか？」

作者「うん。前の後書きでそう書いたし。」

逢「それじゃ始めましょ。」

歩・逢・作「第1章の座談会～～～！」

作「じゃあまず最初のゲストは、ヴァ、コヒとコアです。」

コア「どうも。」

歩「コアなのか。」

逢「この人だれ？あたしたちと歳近そうだけど。」

歩「そつか。逢はまだコアと会ってないんだつたな。」

コア「本編でもこんな感じになりそうね。」

作「それじゃまずこの1章について」

歩「変身した。」

逢「いつもの日常だつた。」

コア「歩とやつと会えた。」

作「もつとなんかないの！？」

歩「だつてそんなにお前文書いてないじやん。」

作「すいません。」

逢・コア「フォローのしようがなじよ（わね）」

作「それじゃ次回はキャラ紹介で。」ノシ

## 登場人物（前書き）

ええ今日は人物紹介です。  
ではスタート。

## 登場人物

### 人物紹介

#### 加藤木 歩／仮面ライダーウィンド

本作の主人公でウインドに変身する。

中学3年生、2年前のある事件で家族を失った。

その後、父方の妹（加藤木 瑞希）に引き取られた。

瑞希の事は義母さんとは呼ばず、瑞希姉さんと呼ぶ。

心が砕けかけた時に瑞希に助けてもらい、家族になつてくれた瑞希が大好きになつた。

仕事が多い瑞希のために家事や料理をするようになり現在は料理の腕が瑞希よりもいい。

勉強は中の下で運動は平均より上である。

そして逢と幼馴染である為、お昼を週に3回作つてもらつている。

だがその事で男子達ボコボコにされている（妬み、嫉妬などが原因。）

面倒見が意外とあり、男女問わず友達も多いが少しネガティブである。

人に何か頼まると断れないタイプ。

#### 仮面ライダーウィンド

歩がリングドライバーを使って変身した姿。

姿は緑と白の姿をしている。

風の力が使い戦う。ほかにも力が使えるらしいがまだ詳しくわかつ

ていない

パンチ力5t キック力10t

歩の心力によって力が変化する  
必殺技は ウィンドストライク  
風を巻き起こし右足に集中させ相手にぶつける。

火咲 逢

本作のヒロインの一人。

歩の幼馴染であり歩の面倒をよく瑞希に任される。

しつかり者でなおかつ美少女であり誰にでも裏表のない感情で接するため

友達も多く男子達の憧れの的。

歩には昔から好意を持っているが告白はいまだにしていない。

ユア (風の化身ヴァ ユ)

本作のヒロインの一人でベルトによって造られた存在。  
歩の過去に深く関わる人物でありその時の事故で歩を助けている。  
ウインドの力の大きさによって自分も風の力が使えるようになる。  
歩にユアという名前をつけてもらい彼と過ごして行くことで自分で  
も分からぬ  
感情が芽生え始める。

三木 来牙

歩のクラスメイトで昔からの幼馴染。

なにかと事件が起ると歩に協力する。

ケンカが強くクラスの男子達を一掃できる力を持つ。

ある事件で歩とは違うベルトを手にする。

### クラスの男子達

歩が逢と仲良くしていると殺す覚悟で襲つてくる歩のクラスメイト達。

来牙は含まれていない。

### 加藤木 瑞希

歩の父親の妹で歩の義理の母。

2年前の事故で家族を失った歩を取り面倒を見ている。  
歳は22歳である歩が事故で心が砕けかけていた時に励まし歩に  
自分が代わりにあなたの家族になると言い歩を助けた。  
そして歩のよき理解者である。

### ディメンション（次元怪人）

ウインドが戦う怪人。

人の負のエネルギーを別の次元から降つて来た隕石が吸収して生み  
出された存在。

人間の心力を食べ強くなる。

## 登場人物（後書き）

こんな感じですがどうでしょうか？

この紹介は物語が進むにつれ変化していきます。

書き終わって気きましたがネタバレが少しあります。

次回は章が変わり夏休み編です。

更新は少し遅くなるかも知れませんがよかつたらまた見てください。

では次回 夏休み編で。

## 第5話（前書き）

予定していた夏休み編  
では、第二章の始まりです。  
グダグダですが、どうぞ。

歩の部屋

ジリリリリリリリ…と時計が頭突くような音を鳴っていました。

「…う、朝か。」

時計を止め歩は田を覚ました。

「…ねむ。」

歩が変身してティメンションと戦つた日から数日たった7月26日。

時間は午前の6時過ぎ、机に置いてある携帯がメールの受信音を鳴らす。

「朝早くから…だれからだ?」

といい歩は携帯取りを開いた、メールは三木からだった。

「来牙?なんの用事だ?」

そのままメールの本文を見ると、

件名 今日暇だろ?

本文

せっかくの夏休みなんだから  
海に行こうぜ！

三木からの誘いのメールだつた。  
「はあ、疲れそつだけど行くか。」

といい返信のメールを送つたあとそのまま携帯を閉じて自分の部屋  
を出た。

そして・・・この海へ遊びに行く事から  
加藤木歩の中学生として最後で最悪の夏休みが始まる・・・。

### 仮面ライダーウィンド

第二章 最後で最悪の夏休み編

## コビング

部屋を出た歩はすぐにテーブルに置いてあるメモを見つけた。

メモには「朝」はんじつかり食べてね。 今日は早めに帰るかい。  
と書いてあった。

「瑞希姉さん今日も仕事早かつたんだな。」

とテーブルに置いてあるメモをみた歩は朝食の準備をした。

・・・・・

朝食を作り食べ終わった歩は食器を洗い上げ

「来牙の奴に何時か聞かないとな。」

「いい三木にメールを送った。」

少し経つと三木からメールが届いた。

件名 時間を教えるぞ。

本文

10時半に現地集合。  
場所は、分かるよな?  
あと他にも声かけたらメンバー  
増えたから。

「つったぐ、メンバー増えたならそいつらがだれなのか位教えるよ。」

「いい携帯を閉じた歩は一旦自分の部屋に戻り必要な物を準備し始めた。」

「え~と、海に行くんだから海パンと、財布くらいでいいか。」

そして準備を終えた歩はある人物に声をかけられた。

「歩、数日ぶりね。」

そこには「」の数日間、姿を見せなかつたコア立つていた。

「なつ！？ コアー？ わ前この数日間どこに行つてたんだよ！！」

「しようがないじゃない。ウインドの力がまだ不完全で存在の力が不安定なんだから」

「力が不安定つて前に話してた俺の心力とかいうやつなの？」

「そうよ、この数日間ティメンションが出現しないで、ウインドの力が上がらないから

今のウインドの力だとあたしは「」の世界に2～3時間しか居られないのよ。」

「そうだったのか、いきなり怒鳴つて悪かつたな。」

「いや、別に気にしていないわ。」

「そうか・・・。」

歩は少し間をあけて。

「コア。俺、これから海に行くんだけど一緒に行かないか？」

とコアに提案した。

「海？いいけど私と一人で行くの？」

「いや、他にもメンバーはいるけど。」

「あ、そう。」

コアは少し残念と思っていたが、歩は全く気づかなかつた。

それから一人は雑談した。

歩は時計を見る、時間は午前の8時半過ぎ、

「じゃ、そろそろ行くか。」

「そうね。」

コアが返事をした途端彼女の頭に小さな頭痛がはしつた。

「クツ、」

と態勢を崩したコアを見た歩はコアの体を支える。

「だ、大丈夫か！？」

「ええ。」

コアをソファによりかかせた歩はコアに質問した。

「いったい、どうしたんだ？」

「ヤツラが出現したのよ。」

「ヤシルヘ・・・・サカ一・・・」

「さう・・・『イメンシヨン』よ。」

「で、場所は分かるのか?」

「ええ・・・場所は歩が約束してたあの海よ。」

それを聞いた歩は驚愕の顔をした。

「な、それじゃ、来牙に危険がーー。」

「さうね、早く海へ向かうわよ。」

「ああ、言わねなくともーー。」

と二人は家を出て海へ向かつた。

## 第5話（後書き）

はい、とこりう事で次回は戦闘です。

数日ぶりの戦いで歩がピンチに、とこりう感じにしようと思つていますが予定が変わる場合もあります。

あんまり長く書けない事に気づいたのでこれから、短くてもいいからとおりあえずはやめに更新する事を頑張ります。  
それでは。

## 第6話（前書き）

はい、6話です  
やつぱり戦闘は書くのが難しいです  
ではじめ。

海の海岸

“ディメンションが来牙と約束していた海へ向かつた歩たちは・・・

「はあ・・・はあ・・・」こが約束してた海だけど。」

「ええ・・・」こにヤツら力を感じるわ。」

だが来牙たちの姿はなく海にはまだ人はいなかつた。

「よかつた。でもまだここに来ている人はいないみたいだ。」

「やうね。」

歩が安心していると空がバキバキッ！…といつ音を鳴らしてヒビが入ったようになった。

「な・・・空が。」

うそだろ、と歩の顔が青ざめる。

「歩ー！ 前と戦ったのとは桁違いの力よ。下がってーー！」

ユアが歩をひっぱり距離をとる。

そして空のヒビがさらに巨大になり

ガラスが割れたようにバリン！…と音を鳴らし出現したあと地面と海が大きく揺れた。

歩とユアは出現したディメンションを見る。

その姿は歩が数日前に戦ったのとは比べ物にならない大きさと獸のよつな姿をしていた。

「なんだよ、あの『テカさはー!』?」

「歩ーーー来るわよーーー」

ユアがベルトを取り出し歩に渡す。

大型デイメンションは ガアアアアアアアーー!

と咆哮をあげ歩たちのいる場所へもの凄い早さで向かってくる。

その頭の先には一本の鋭い角があつた。

そのまま大型デイメンションは歩たちのいる場所へ突撃した。

「変身ーーー」

「リング・イン・ライダー・ウインド」

ベルトを受け取った歩はドライバーにリングを装填しウインドへ変身した。

「歩……」

とコアがウイングに向かってリングを投げる。

「これは？」

「ウイングの力が増えたから新しいリングが出現したらしいの。その一つをつかって……」

受け取った手にはリングが一つあった。しかもリングを装填するスロットが右手と腰に一つずつ増えていた。

そしてウイングはギリギリの所で大型ティメンションの突進を避けコアから受け取ったリングを右手に装填する。

「ウエポンリング・イン・ウイングブレード」

ベルトが声を発すると右手が風がに包まれ、剣が出現した。

「ああ、行くぞテカイの……」

出現した剣くウインドブレードを掴みそのまま巨大ティメンショ  
ンの後ろ足へ斬りかかった。

「ハアアアアアアアーー！」

振り下ろしたウインドブレードはそのまま足に当たるが弾かれる。

「クソッ！－！」

「ガアアアアアアアーー！」

ティメンションの角から雷撃が放たれそのままウインドへ遅いかか  
る。

だがウインドはソニックのリングをドライバーに装填し

何とか避けたが・・・。

その隙にティメンションの前の足の爪が伸びウインド斬り吹き飛ば  
した。

「ぐあ！」

攻撃を喰らつたウインドは数メートル吹き飛ばされる。

そして何度もバウンドしゃつと止まつた。

「ツ・・・・痛、クソ！！」

転がつたウイングは立ち上がりすべりウイングブレードを構えようとするが

「つて・・・剣がない！？」

ウインドブレードは吹き飛ばされたときにウインドの右手から離れてしまっていた。

ディメンションは咆哮しう本の角を伸ばし、そのままウイングへ突進する

「へへへーー（）」のままだとヤバいー。せつとき貰つたもう一つのまつで

……」

ウイングはさつき使ったのとは別のリングを取り出しどライバーの腰のスロットへ装填した。

「バイバークルリング・イン・マシンウイング」

ベルトがそう発するとウイングの田の前にバイクマシンウイングアームが出現した。

「これは・・・ウイングのバイクか。」

ウイングはマシンウイングザアに乗りなんとか大型ティメンションの突進を回避する。

すると、大型ティメンションは自分の出したスピードに耐えきれずそのまま転倒した。

そしてその隙にウイングは吹き飛ばされたウイングブレードを取りに向かう。

だが、突進を回避された大型ティメンションがすぐに態勢を立て直

しウイングへ向かつてきた。

「……、」Jのままだと追いつかれる……」

ウイングはウイングブレーキをなんとか取りそのまま方向転換してイメンションへ向かつた。

そのままバイクはスピードを出す。

「Jから反撃だ……『カイの……』」

そう叫んだウイングは剣を構えバイクで大型『イメンションへ突っ込んだ。

## 第6話（後書き）

はい、こんな感じです。

次回はウインンドが新しい必殺技を出します。（ちなみに剣の）  
次は早めに投稿したいと思うのでよかつたら見てください。  
では。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0929v/>

---

仮面ライダーウィンド

2011年9月26日23時26分発行